

# 平成 30 年度環日本海学術ネットワーク特定テーマ研究 「SDGs と北東アジアにおける資源の持続可能な利用」報告書

富山大学極東地域研究センターでは、「SDGs と北東アジアにおける資源の持続可能な利用」として、本年度調査・研究を行ってきました。その一環として、2018 年 11 月に「北東アジアの環境問題: ESG・SDGs の時代に問う」と題して一般向けのシンポジウムを開催しました。当日は学生を含めて、約 50 名弱の参加があり、活発な議論が行われました。

シンポジウムでは、はじめに神戸大学の石川雅紀教授から「循環型社会のゴールイメージと移行における企業の責任」というタイトルでご講演を頂きました。講演では、日本における循環型社会の指標をいくつか掲げ、その推移を示した上で、さらなる進化を遂げるためには、(1)消費者主導型パス (Demand pull path)と(2)供給側主導型パス (Supply pull path)のうち、前者が特に重要になってくるとの見方を示しました。その根拠として、3R 推進団体連絡協議会のデータを提示し、我が国において過去10年程度の間に「環境問題に関する意識が低下している」こと「3R の認知度が低下して

いる」ことを挙げました。2000 年が循環型社会元年と呼ばれ、周知活動が積極的に始められた際と比べると、広報予算は確実に減少していますし、今後とも増加することはないとみられま

## 北東アジアの環境問題

— ESG・SDGs の時代に問う —

**日時：2018年11月09日(金) 14:00-17:00**

**場所：ファーストバンクキラリホール (富山市西町 5-1) 参加無料・下のリンクから登録願います**

---

### プログラム

司会：山本雅貴 (富山大学)

**14:00- 14:05 開会の挨拶** 富山大学研究推進機構極東地域研究センター 堀江典生

**14:05-14:35 「循環型社会のゴールイメージと移行における企業の責任」**  
神戸大学経済学研究科教授・石川雅紀

**14:45-15:15 「中国の近年の大気質の変化の趨勢と対策」**  
清華大学環境政策研究所 所長・常杉、北京師範大学環境学院 副教授・田欣

**15:20-15:40 休憩・ポスター展示**

**15:40-16:10 「暮らして感じる環境問題の中日比較」**  
富山大学研究推進機構極東地域研究センター協力研究員・染野憲治 (環境省)

**16:20-16:50 「循環経済における拡大生産者責任の役割」**  
慶應義塾大学経済学部教授・細田衛士

**申し込み先：**当センターのHP (<http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/index.html>)から登録をお願いします。

主催：富山大学研究推進機構極東地域研究センター (問合せ：TEL: 076-445-6510)、後援：富山県・人間文化研究機構・富山第一銀行  
この講演会は平成 30 年度環日本海学術ネットワーク特定テーマ支援事業の助成対象事業です。

## 3Rの認知状況は低下している

	意味を理解し、常に行動している	言葉の意味は知っている	言葉を聞いたことはある	知らない (%)	言葉の理解度	言葉の認知度
凡例						
2009年7月調査	9.6	27.0	24.9	38.5	36.6	61.5
2011年6月調査	9.8	26.8	22.7 <span style="border: 1px solid red; border-radius: 50%; padding: 2px;">+7pt</span>	40.7	36.6	59.3
2016年9月調査	9.4	23.3	19.7	47.6	32.7	52.4

※言葉の理解度=「言葉の意味を理解し、常に行動している」+「言葉の意味は知っている」  
※言葉の認知度=「言葉の理解度」+「言葉を聞いたことはある」

2018/11/9

© 石川雅紀

3R推進団体連絡協議会サイトより引用

す。そのような中では、これまでと同じ周知活動を行なっているだけでは進展が期待できないので、新しい切り口が必要となると強調されました。

次に中国の清華大学にて環境政策を専門としている常氏により中国の大気汚染の現状についての報告が行われました。中国、特に清華大学がある北京は大気汚染が深刻であることが知られています。しかし、本報告によれば状況がかなり改善されてきていることがわかりました。また何よりもインパクトがあったことを最新のIT技術を駆使して、工場等の煙突で測定されている大気汚染物質の排出状況をリアルタイムで計測し、集計するシステムを極めて短時間で導入し、分析に活用している点でした。GIS等を生かした「見える化」を進められており、中国経済のスピード感をあらためて感じる講演でした。

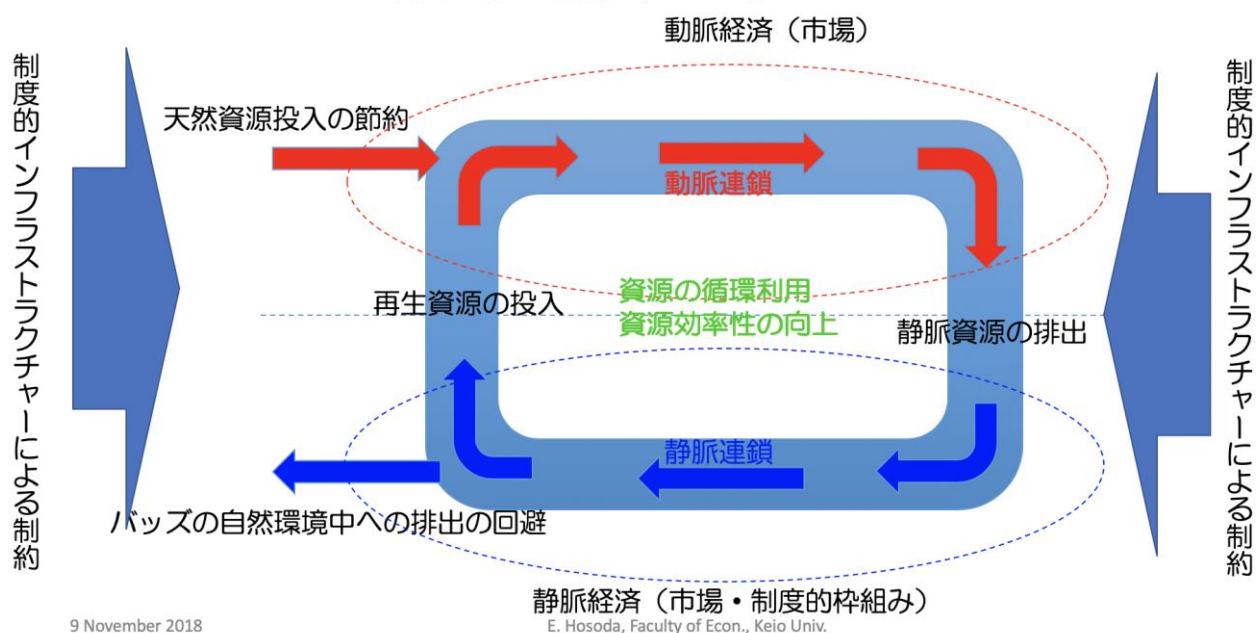


休憩を挟んで後半はまず富山大学研究推進機構極東地域研究センターの協力研究員を務めている染野憲治氏(環境省)より「暮らして感じる環境問題の日中比較」というタイトルでご講演をいただきました。染野氏ははじめに過去20年間程度の間中国各地で経験した経済発展のスピード感や環境汚染の状況について豊富な映像資料に基づいて説明されました。その上で、中国国内

で環境改善が着実に進んでいることも数多くの資料に基づいて示されました。特に、中国における環境関連予算・人的投入を日本と比較した場合、その国土の大きさを考慮すると極端に少なく、できることが限られている中で着実に成果を挙げてきていると感じました。

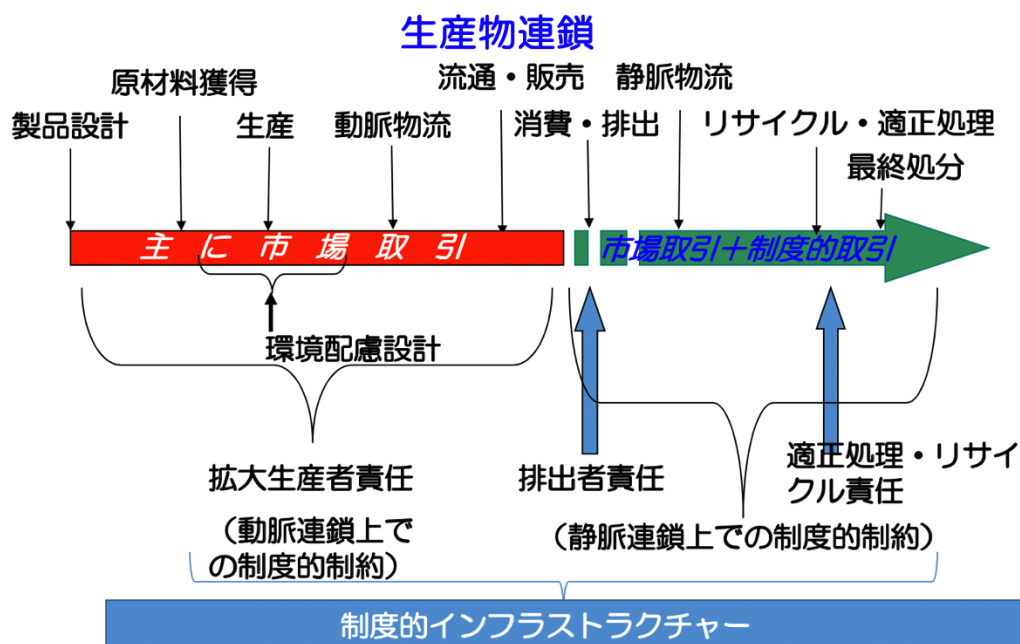
最後に、慶應義塾大学の細田衛士教授より「循環経済における拡大生産者責任の役割」としてご講演を頂きました。ここでいう循環経済とは普通名詞として使用されているのではなく、EUが提案している「Circular Economy: CE」を指しています。CEとは、資源を収奪的に生産・消費・廃棄する (take-make-use-disposal) 経済、すなわち「一方通行経済」(Linear Economy) と対局になる概念で、動脈経済と静脈経済がスムーズに接合されることによって天然資源の経済系への投入が最小化される一方、廃棄物の自然系への排出量が最小化されるような経済を指しています(細田・山本, 2017)。我が国のいわゆる「循環型社会」とほぼ同義と考えて良いですが、「経済」という言葉が付いていることから分かるように、経済活動、特に「雇用の確保」を強調する側面がやや強いのが EU らしい特徴となっています。

## 循環経済のイメージ



講演では、CE 導入の大きな一つの理由は、生産者は消費後の段階での使用済み製品の置かれた状況に注意を払う動機をもたないということだと指摘されました。資源の有効利用には生産物の取引フローの制御(生産物連鎖制御)が必要であり、付加価値の付け所を変え、ビジネススタイルを変えることによって経済の活性化が可能になるというのです。

# 生産物連鎖制御のイメージ



E. Hosoda, Faculty of Econ., Keio Univ.

上の図は、生産物連鎖制御のイメージです。制度的インフラストラクチャーをしっかりと構築することによって、廃棄物の排出者責任だけでなく、適正処理や拡大生産者責任を課すことによって、資源の高度な循環利用が可能になります。

時代は少しずつ変化し、販売の対象がモノからコトへ移り、特に若い人たちはモノを欲しがらないと言われています。これからの経済では、モノから付加価値が生まれるのではなく、コトから付加価値が生まれる。リース、レンタル、プロダクトサービス、シェアリングがもっと盛んになってくると思われます。そのような社会ではこれまでと比べて生産物連鎖が変わり、連鎖上での制御がやりやすくなる可能性があるため、資源の高度な循環利用へ社会を変化させる千載一遇のチャンスに我々は直面しているということをしかりと認識すべきであると主張されました。

ESG 投資の波は GPIF など我が国の機関投資家にも浸透し、SDGs と同様にもはや避けて通れないものになっています。我々は、SDG の目標 12「つくる責任・つかう責任」についてもう一度向き合っていく必要があります。